

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.110 April, 2011

目次

新年度のあいさつ

CAPS 所長 (経済学部教授) 中神 康博 ... 1
アジア太平洋研究センター (CAPS) からのお知らせ ... 2
報告・CAPS 設立 30 周年記念連続講演会 「人間の安全保障と北東アジア」 第 3 回講演・テッサ・モーリス＝スズキ氏 「再考・北東アジアの未来 移住・多様性・人間の安全保障」 CAPS 主任研究員 愛甲 雄一 3
センター叢書紹介 小島紀徳・江頭靖幸編 『沙漠を森に 温暖化への処方箋』(コロナ社) 工学部教授 小島 紀徳 工学部特別共同研究員 黒澤 勝彦 4
加藤節編 『デモクラシーとナショナリズム アジアと欧米』 (未来社) 法学部特別任用教授 加藤 節 5
特別寄稿 「レタマの花」 格差社会における紛争後の平和構築 文学部教授 細谷 広美 6

報告

日本アメリカ文学会主催「バーバラ・ジョンソンの遺産 と 21 世紀」ワークショップ 国立長野高専准教授 小宮山 真美子 7
寄稿 中村春二先生と中村彝 CAPS 客員研究員 重野 純子 8
2010 年度 新規プロジェクトの紹介 (第 3 回) 難民・強制移動民研究の新境地 文学部准教授 墓田 桂 9
アイデンティティの創生と多元的世界の構築 法学部教授 湯山 トミ子 10
2011 年度 新規研究プロジェクト一覧 11
シリーズ・本を読む 吉見俊哉、テッサ・モーリス・スズキ 『天皇とアメリカ』(集英社 2010 年) CAPS 所員 (文学部准教授) 中野 由美子 ... 12
リービ英雄 『我的日本語』(筑摩書房 2010 年) 法学部客員研究員 今井 隆太 13
アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 14

新年度のあいさつ

CAPS 所長 (経済学部 教授) 中神 康博

今年度から 3 年間にわたって引き続きアジア太平洋研究センター所長を務めさせていただくことになりました。成蹊大学学長に選出された前所長の亀嶋庸一教授からの引き継ぎの際に、真っ先にセンターが抱える大きな宿題についての説明を受けました。すでにご存知の方も多いと思いますが、アジア太平洋研究センターが設立されたのは 1981 年のことですからセンターは今年ちょうど設立三十周年を迎えます。それに加えて来年 2012 年には成蹊学園創立百周年ということで、大学、学園として何か記念事業をセンターとして企画して欲しいというものでした。わたくしが所員や運営委員としてセンターのお手伝いをしている頃の記憶が脳裏をよぎりましたので、「大変なことを引き受けることになる」それが正直な気持ちでした。しかし、それは杞憂に過ぎませんでした。いまのセンターは教員スタッフと事務スタッフ、そして研究スタッフのそれぞれの仕事の棲み分けがうまく行われていますし、大学や学園からの温かい支援もあって研究センターとしての役割を存分に発揮できる体制づくりが着実に進んでいます。

この素晴らしい仕事環境のなかで、昨年度は亀

嶋前所長からの宿題をこなすべく自らのペースを保ちながら無理なく助走させていただくことができました。共同研究プロジェクトやパイロット研究など大学教員の研究サポートはもちろんのことですが、(私の立場からすれば手前味噌ということになるのかもしれませんが、誤解を恐れずに申し上げると) ジャーナルや



ニュースレターも以前にも増して充実した内容になっています。また、センター・学園の記念事業の一環として「人間の安全保障と北東アジア」というテーマで連続講演会を開催し、国際教育センターの協力を得て「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」というテーマで学生向けに映画の上映会を主催しました。さらには、センター特別研究員の企画によって「映像の可能性 - 文化を記録するとは何か」というテーマで映像を交えた連続講演会を

開催し、学内外の方々と交流をもつことができました。これらの活動を通して、アジア太平洋研究センターが絶えず進化していることを肌で感じることができましたし、センターを愛して下さっている方々が「大勢いらっしゃるということ」をひしひしと感ずることができた一年間でもありました。

今年度はいよいよアジア太平洋研究センター三十周年・成蹊学園創立百周年の記念事業を実際に行うに移すときです。さっそく今夏には「東アジアの歴史と思想（政治思想学会との共催）」また今年度末には「人間の安全保障と東北アジア」というテーマでそれぞれ国際シンポジウムを開催する予定です。所属や運営委員の方々をはじめ多くの方々のご意見に耳を傾けながら、センターの研究スタッフそして事務スタッフとともに記念事業を盛り豊かなものに

したいと考えております。昨年度と同様に、皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

昨年度末になって東日本は未曾有の自然災害に見舞われ、それに端を発する原発事故、そしてその事態収束の長期化など憂慮すべき事案が山積するなかでの新年度のスタートとなりました。呆然と立ち尽くし曖昧な不安を抱く一方で、国家の枠を超えた多くの方々による支援の輪が国内だけではなく世界中に広がっていく光景に勇気づけられました。「ひとりじゃないんだ」という世界中からのメッセージを心に刻みながら、この大震災の経験から日本をとりまくアジア太平洋地域の問題を考えるうえでの大きなヒントが得られるような気がしてなりません。被災された方々に心からお見舞いを申し上げ、犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表します。

アジア太平洋研究センター（CAPS）からのお知らせ

2011年度のCAPS企画

アジア太平洋研究センター（CAPS）では今年度も引き続き、本学の研究者のみならず学生や学外の方も対象にしたさまざまな企画を行なって参ります。

現時点（2011年4月上旬）では、センター設立30周年・成蹊学園創立100周年の記念事業として昨年度後半に行なわれた連続講演会「北東アジアと人間の安全保障」を受けて、連続企画「人間の安全保障と東北アジア（仮題）」を今年度も行なっていくことが、既に決定しております。7月に行なわれる第1回目の講演会（右のボックス内を参照）を皮切りに、夏休み後も関連するテーマで、講演会やシンポジウムなどを順次開催してゆく予定です（詳細につきましては、後日さまざまな形でお伝えして参

ります）。またその他にも、本学の学生を主たる対象とした映画上映会などを、装いも新たに今後も行なっていく予定です。ご関心のある方は、今後のセンターHP、学内外に貼り出される掲示等にご注目ください。

連続講演会「人間の安全保障と東北アジア（仮題）」 第1回講演会の予定

日程：2011年7月9日（土）15:00～

テーマ：未定

講師：板垣雄三（東京大学名誉教授）

場所：成蹊大学内講義室

以上は2011年4月時点での情報です。テーマや会場については、今後センターのHPなどでご確認ください。

センター叢書発刊のお知らせ

アジア太平洋研究センター（CAPS）による支援を受けた共同研究プロジェクト（3年間）2件の成果物が、この3月末にセンター叢書として発刊されました。2008～11年度にかけて行なわれた「植林・バイオマス研究」プロジェクト（代表・小島紀徳理工学部教授）の集大成『沙漠を森に 温暖化への処方箋』（コロナ社）、および2007～2009年度の「デ

モクラシーとナショナリズム」プロジェクト（代表・加藤節法工学部教授〔当時〕）から生まれた『デモクラシーとナショナリズム アジアと欧米』（未来社）の、以上2冊です（これらの書籍の紹介文を、4～5頁に記載してございます）。センター併設の図書館でも貸し出しを行なっておりますので、関心を持たれた方はどうぞご利用ください。

2011年度 学術研究員募集のお知らせ

現在CAPSでは、今年度の学術研究員を募集しております。詳しくは、当センターHPをご覧ください。

申請受付期限：5月6日（金）17時

対象者：成蹊大学大学院在籍者
支援の内容：短期メンター制度（学外の研究者等を「メンター」として、研究指導のために短期間本学に招聘できる制度）、研究会開催の支援、センター諸設備の利用、など

報告・アジア太平洋研究センター設立30周年記念連続講演会
「人間の安全保障と北東アジア サステナブルな地域社会をめざして」

第3回講演・テッサ・モーリス＝スズキ氏(オーストラリア国立大学教授)

「再考・北東アジアの未来 移住・多様性・人間の安全保障」

CAPS 主任研究員 愛甲 雄一

今、極寒の北海道北部が深刻な飢餓に見舞われ、ひとびとが食糧難のみならず燃料不足、伝染病に苛まれている。そんなとき私たちは、どうこの事態に反応するだろうか。

「再考・北東アジアの未来 移住・多様性・人間の安全保障」と題されたテッサ・モーリス＝スズキ氏の講演は、このような問いかけから始まった。もとよりこれは、架空の事態に対する問い以外の何物でもない。このような状況に直面しているのは、北海道ではなく北朝鮮のひとびとだからである。しかし北海道も北朝鮮も実は、ここ東京からはほぼ等距離の場所にある。にもかかわらず私たちの多くは、一方には救いの手を差し伸べようとするだろうが、他方には無関心でいても至って平気である。これはいったいなぜなのだろうか。

氏は、この問いに対する答えのなかに、現在東北アジア地域が直面している諸問題を乗り越えるための力がある、と考えている。特に90年代以降、域内各国が著しい経済成長を成し遂げ、ひとびとの移動も活発化するなど、この地域も大きな転換点を迎えている。が、その政治秩序やひとびとの思考様式は依然冷戦時代の残滓を引きずり、アメリカを含むいずれの諸国も、この地域が平和的な秩序へと移行していくにふさわしいビジョンを創り出せていない。いったい何が、私たちの創造(想像)力を枯渇させているのだろうか。

その理由を明らかにするために、氏は、文化表象をめぐる争いが現代の紛争や戦争において重要な要素を占めていることを、まず指摘する。ひとびとの間に「私たちus / 彼らthem」という境界線を設け、「彼ら」を非人間的な文化体系を備えた存在として表象すること。要するに相手を「鬼畜」と見なすことが、その「敵」に加えられる暴力の正当化、ひいては不可視化を生み出すのである。事実これこそ、現在日本が北朝鮮のひとびとに加えている暴力の原因にほかならない。あのような「危険」な政治体制を支える北朝鮮のひとびとは人非人であり、したがって彼らにいかなる仕打ちを加えようと、そこに良心の呵責をおぼえる必要はない。彼らは北海道の「人間」たちとは違う……。

氏が乗り越えようとするのは、政治家の発言やメディアの報道、そして私たちの思考のなかにも深く巣食うこの「私たち / 彼ら」の区分を絶対化するような言説である。そこで氏は、アメリカの政治哲学者W・コノリーの「深い多元主義 deep pluralism」概念に依りながら、この種の言説に対抗する道筋を探ろうとする。氏によれば、「深い多元主義」とは、

各個人が異なる信仰や信念・生活様式を持つことをお互い尊重しながら、しかしそれらを他者には強制せず、その他者と交信・交感し合える状態のことを意味している。そしてこの状態こそ東北アジア地域が今後創り出していくべき「人間の安全保障」の姿だというのが、氏の主張にほかならない。そうした努力は国家レベルのみならず個々人のレベル、あるいはNGO等を中心とした「市民社会」のレベルで行われるべきものである。そして、あなたがたもまた東北アジアの未来を創り上げていく主人公なのだ、と聴衆に向かって述べたところで、氏は約1時間に及ぶその講演を終えたのであった。



〔テッサ・モーリス＝スズキ氏の講演会の様子〕

以上のようなモーリス＝スズキ氏の講演は、とかく紛争や対立の言語のみによって表象されがちな東北アジア地域において、平和や協力の言語を導入しようとする試みであった、と言える。またそれは、同地域に生きる私たちに向かって、今後の東北アジアはどうあるべきか、まずはその青写真を描き出すことから始めよう、と呼び掛ける、いざないの意味をもった講演でもあった。ところで、この氏の呼び掛けは、即座の反応を聴衆に呼び起こした、と言ってよい。というのも、講演に続いて行なわれた質疑応答の時間において、性別・年齢・国籍・民族的出自などの点で実に雑多な人たちが、しかし等しく「未来志向」的な観点から、次々に発言や質問を求め続けたからである。これはまさに心躍る瞬間であった。このとき、約200名近くが集まった会場のなかに明るい日差しが差し込んだように感じたのは、おそらく筆者1人だけではない。

それは、まさに氏の言う「深い多元主義」の状態が花開いたひと時ではなかったか。主催者の1人として、このような瞬間を生み出すうえで多大な努力を惜しまなかった講演者のモーリス＝スズキ氏、そしてともにそうした瞬間を作り上げて下さったすべての参加者の方々に、この場を借りて、心から感謝申し上げたい。

センター叢書紹介

小島紀徳・江頭靖幸編

『沙漠を森に 温暖化への処方箋』（コロナ社）

理工学部教授 小島 紀徳、同特別共同研究員 黒澤 勝彦

本書は、成蹊大学アジア太平洋研究センターの一叢書であり、同センターの2008年度から2010年度のプロジェクとして実施されてきた「アジア太平洋地域における乾燥地植林による二酸化炭素固定とバイオマス生産・転換」の成果報告書として刊行されるものである。本書を刊行することができたのは、同センターによるバックアップのお陰である。この場をお借りしてまず御礼申し上げたい。

振りかえれば著者は1988年にも、同センターにて1年間「アジア太平洋地域における砂漠化に関する調査、解析およびその防止法、緑化法」なるプロジェクトにおいても責任者を務めさせていただいた。またほぼ同時期に、沙漠の現状と問題点も議論する日本沙漠学会の設立・参加、東京大学の小宮山宏教授（後に総長）主催の化学工学会 CO₂研究会における二酸化炭素吸収源創出技術としての植林の重要性についての議論、ついで、1995年 Desert Technology 本栖湖（日本沙漠学会後援）での議長と「炭素固定のための乾燥地植林」のセッションでの討議。同センターの研究プロジェクトは、まさに著者の新たな研究分野である「炭素固定のための乾燥地植林」へのスタートポイントであった。

その後、幸いなことにJST 戦略的基礎研究CREST、環境省地球環境推進費、そして本プロジェクトと同時進行で三井物産環境基金の採択も受けることができ、「炭素固定のための乾燥地植林」を多くの共同研究者達とともに進めることができた。本書はまさにこれらの研究プロジェクト「仲間」による共著であり、これらの十数年にわたるプロジェクトの成果でもある。

著者は本書の冒頭で、なぜ「沙漠を森に」すると温暖化が防げるのか、なぜ森にすべき対象地が沙漠・乾燥地なのか、その必要性について述べている。続いて調査を行ってきたオーストラリアの研究対象地域の自然環境の概要と、現地における植林に対する環境条件の問題点を挙げ、著者らがそれらの問題点を克服・低減化するために取り組んださまざまな植林技術について紹介している。特に著者と東京大学の山田興一教授（2004-2008年に当大学へ特別研究招聘）、筑波大学の安部征雄教授が研究者／

発明者として名を連ねる特願2003-103345・特開2004-305098「乾燥地植林のための土地改良方法」の方法やその効果、同技術の改良方法などについても写真やデータを交えて紹介しているので、興味のある方は本書でご確認いただきたい。本書

の終盤では一連の研究成果をまとめ、そして我々の研究成果の応用とその効果の展望について考察している。世界には、本研究プロジェクトが対象とした年間降水量200～300mmの地域や、ハードパンや塩害・湛水害によって樹木が根を延ばせないために植生の繁茂が不十分で、人間にとって未利用地となっている地域が広大に広がっている。その面積は、なんと陸上面積の約1/3にも及ぶのである。また著者が本書で最も述べたかったことは、農耕による食料生産が不可能な荒漠地であっても、樹木なら植えて生長させて有効利用することができるということである。本書で紹介している技術の応用と、それらの地域の有効性についてご推察頂けると幸いである。

日本は湿润温暖な地域であり、沙漠や乾燥地などはない。しかし、世界の数%を占めている国内でのエネルギー消費量を、その一部を太陽などの自然エネルギーに変えてゆくことはできるしそうすべきではあるが、すべてを置き換えられるほど甘くはない。安価な太陽電池を造り、あるいはそれを作る技術も含め、これを海外に「輸出」することが、地球のためになることは、容易に理解して頂けるだろう。同様に、「日本には沙漠など無いのに」などとは思わないでいただきたい。日本の技術で「沙漠を森に」変えてゆくことこそ、「地球のためにできる」日本人がなすべきもう一つの貢献なのである。



加藤節編

『デモクラシーとナショナリズム アジアと欧米』(未来社)

法学部特別任用教授 加藤 節

政治学や歴史学の領域において、デモクラシーとナショナリズムとは問われることのもっとも多い主題群に属している。そのそれぞれに関しこれまで膨大な量の研究が積みだされてきたのは、その当然の帰結であった。

まずナショナリズム研究について言えば、「民族自決」の波が高まった第一次大戦後、植民地解放が進んだ第二次大戦後といった二つのピークを経つつ、それは持続的に行われてきた。そこで問われたのは、思想および運動としてのナショナリズムの担い手は誰か、ナショナリズムは産業化や国民国家形成と関連する近代の現象なのか、ナショナリズムはなぜ死滅しないのか、ネイション(nation)概念は歴史や伝統に根ざす実体的なものか、それとも必要が生み出した創造物なのかといった問題であった。また冷戦後の民族紛争の激発を受け、「民族的ナショナリズム ethno-nationalism」や「グローバル時代におけるナショナリズム」についての分析が精力的に行われてきたことも、周知の通りである。そこでの論点は、体制としての社会主義崩壊後にナショナリズムが勢いを増したのはなぜか、それが容易に消滅しないのは人間集団が共有する文化や伝統に基礎を置くエスニシティがその根底にあるからではないか、といった問題であった。

他方、デモクラシーに関して、その歴史や実態をめぐる研究が途切れることなく蓄積されてきた。特にそれが無知な大衆の支配を含蓄するマイナス・シンボルから自由かつ平等な人間にもっともふさわしい統治体制を指示するプラス・シンボルへと転化した十九世紀中期以降、デモクラシーは社会科学における中心テーマの一つであり続けてきた。しかも近年は従来と異なる視点からの考察が目立ち、例えば弱体化する政治参加を促しデモクラシーを活性化させようとする観点からの議論や、代議制デモクラシーにおける代表性の危機を民衆側の価値観の多様化に関連して論じる議論が、盛んに行われている。ロック流の立憲的代議制リベラル・デモクラシーとマキャヴェッリに始まるリパブリカニズムの伝統との関係も、今日大きな論点になっている。冷戦後にリベラル・デモクラシーの「勝利」による「歴史の終焉」が叫ばれたことも、よく知られている。国民国家の構成原理をなすナショナル・デモクラシーとして定着した近代デモクラシーに対し、トランス・ナショナルなデモクラシーを構築しつつあるEUの実験がデモクラシー史においてもつ意味もまた、頻繁に問われてきた。

このように、時代の動向に対応しつつ、ナショナリズムとデモクラシーとに関する個別研究は、この

上なく豊かな歴史を刻んできた。ところが、その双方の関係については十分な検討がなされてきたとは言えず、研究史における意外な欠落をなしている。それには、以下の二つの理由が考えられよう。

第一は、デモクラシーとナショナリズムとの起源に関する隔たりであ

る。前者が古典古代に淵源をもつものに対し、後者は少なくとも思想および運動としては近代の産物であるという事実が、双方の関係を正面から問題化する視座の成立を阻んできた。第二の理由は、デモクラシーが十九世紀中期以降プラス・シンボルに転じたのに対し、ナショナリズムは排外的自民族中心主義などの病理に陥りやすいと目され、ゆえにその二つは同列に論じ得ないと考えられてきた点である。「ネイション・ステイトとはエトノスとデモスとの偶然的結合」であり、「民主主義的国民性を民族的同一性に根をもつものとする必然性はない」とのハーバマスの言明は、その点を暗示するものであった。

けれども、デモクラシーを構成原理とするとともに、政治社会としての共同体性をネイションの観念によって調達してきた欧米の近代国民国家の例が典型的に示すように、デモクラシーとナショナリズムとの間には、一定の相関関係が認められる。そうであるとすれば、研究史の空白を埋めるためにも、またデモクラシー論とナショナリズム論とをより豊かなものにするためにも、両者の関係を考察することは依然意味のある作業だと言ってよい。ただし、その関係は歴史的にも地域的にも多様であって、ヨーロッパ近代の場合のような一義性をもつわけではない。本書は、こうした前提に立って、欧米とアジアとにおけるデモクラシーとナショナリズムとの関係の諸相に、専門を異にする各執筆者が立てた独自の視点から光を当てようとする試みである。これまで論じられることの少なかった主題に取り組んだ論者から成る本書が、デモクラシーとナショナリズムとに関心を寄せる人々の思索に資するものとなることを大いに期待したい。



特別寄稿

「レタマの花」 格差社会における紛争後の平和構築

文学部 教授 細谷 広美

アンデスの夕暮れは息を飲むほど美しい。ペルーアヤクチャの空港を飛び立ったプロペラ機は、6000m級の山々を有するアンデス山脈の空へと昇る。空は、黄色、茜色、紫、青、群青と光の帯をなして染まる。その時、プロペラの音を避けるために耳栓代わりに入っていたイヤホンから、ウィリアム・ルナが歌う「レタマの花」が聞こえてきた。

「広場に咲く黄色いレタマの花よ」「広場の5隅に待機した軍がなだれ込む」「心やさしきワクタ(地名)の学生たちを殺害する」「心やさしきワクタの農民たちを殺害する」「なんてことだろう(jcarajo!)」ルナの甘い声が、アヤクチャ県でよく知られたワイノ(アンデスの民謡)を淡々と歌う。

ペルーでは、ゲリラ・グループと政府軍の内戦及び権威主義的政治下で、約7万人の死者及び行方不明者が生み出された。1980年～2000年の間に起こったことを調べる目的で組織された真実和解委員会が、2003年に提出した最終報告書によると、死者及び行方不明者のうち75%は先住民言語を話す人々で、40%はアヤクチャ県の犠牲者であった。しかし、被害が大きかったのが、社会的に周縁的位置にある先住民を多く抱える農村地域であったこともあり、その後の継続的調査や補償は遅々として進まずにきている。

これには政治的理由もある。真実和解委員会の調査対象となった1980年から2000年までに政権をとったのはベラウンデ・テリー(1980-85)、アラン・ガルシア(1985-90)、フジモリ(1990-2000)であり、フジモリ元大統領はすでに裁判にかけられ禁固25年の実刑を受けている。期間を通じて最も



〔秘密墓地の発掘作業に携わるNGOのEPAFが発掘した遺体の共同墓地に、花を手向けに向かうアヤクチャ県プティス村の人々。EPAFの代表者のホセ・パブロ・バライバルは2011年度のCenter for Justice and accountabilityのJudith Lee Stronach人権賞を受賞している。村は電気も水もなく、非常時の通信手段としての携帯電話の電波は山道を6時間歩かなければ届かない。〕

多くの犠牲者をだしたベラウンデ元大統領は故人となっているが、ガルシア大統領は再選された現職の大統領である。

真実和解委員会の最終報告書は、集団補償、個人補償、国内避難民への集団補償を提言したが、集団補償はほぼ完了し、ようやく個人補償及び国内避難民への集団補償のための登録が実施されている。しかし、第一次ガルシア政権下で起こったことを明らかにしていくことは、米州人権委員会等を通じてガルシア大統領が裁判にかけられる可能性が高まることを意味する。それ故、ガルシア政権は極めて官僚的な方法で登録を妨げてきている。被害が深刻であったアヤクチャ県では犠牲者の登録作業に対して中央政府が予算を大幅に削ったため、地方政府やNGO等が作業を引き継ぐことになった。筆者がインタビューをした地域では、約8000人の登録者に対して、作業に従事する職員はわずか2名であった。あまりの激務にこれまで何度も担当職員が変わってきている。昨年のインタビュー時点で担当していたのは、自身も紛争の間に親を殺害された青年だった。青年は類似した境遇の人々を思い、早朝から列をなす人々を前に、昼食をとる間すらない状態で仕事を続けてきている。

紛争の間に殺害された人々が埋められた秘密墓地の調査、発掘作業に関しても、真実和解委員会の報告書では4660余りが確認されているが、国内には発掘に携わる形質人類学者を養成する専門課程すらなく、政府が組織したわずかな数のグループとNGOがこの作業に携わっている。秘密墓地のうち不当逮捕と拷問が繰り返されたカピトの名で知られるアヤクチャ市近郊にあった軍の施設内には、炉まで存在していた。

秘密墓地の発掘に携わるあるNGOによると、集団補償の名のもとに、まだ調査がおこなわれていない秘密墓地の上に役場や学校などが再建されている例すらあるという。最も大規模な虐殺がおこった時期からすでに30年近くを経て、発掘や見元確認の手掛かりとなる直接の記憶をもつ人々も亡くなりつつある。調査はすでに時間との闘いとなっているが、あたかも死者たちが二重に葬り去られていくのを待っているかのようである。

アヤクチャ県を襲った暴力の嵐の犠牲者たちの声は、グローバル化の進展のなかで経済的繁栄を享受する首都リマには届かない。それどころか貧困と失意は麻薬業者を利する、新たな労働力の供給要因となりつつある。今年ペルーは大統領選挙を控えている。心やさしき若者たちの希望が、再度薙ぎ倒されてしまわれないことを祈る。

報告

日本アメリカ文学学会主催「バーバラ・ジョンソンの遺産と21世紀」ワークショップ
国立長野高専 准教授 小宮山 真美子

2009年8月27日、アメリカの脱構築批評家バーバラ・ジョンソン（以下BJと記す）が、小脳性運動失調症（英：cerebellar ataxia）のため急逝した。BJはポール・ド・マンに師事してイエール学派の一翼を担い、「差異」（difference）をキーワードに旧来の定説を軽快に転覆させてゆく一方で、あの難解なデリダの英訳者としての仕事もこなした批評家である。一世を風靡した彼女の『批評的差異』（1980）や『差異の世界』（1987）に記された巧みな脱構築批評は、今なお読む者の心を躍らせる。そのBJ死去というショッキングなニュースに、国内外の研究者たちが各地でBJ追悼記念の催しを行った。

日本では昨年10月に立正大学で開催された日本アメリカ文学学会全国大会に於いて、成蹊大学の下河辺美知子教授が発起人となりBJ追悼ワークショップが開催された。ワークショップは2部構成で、前半ではBJにゆかりのある4人のアメリカ文学研究者（下河辺美知子：成蹊大学、阿部公彦：東京大学、竹村和子：お茶の水女子大学、巽孝之：慶應義塾大学）がそれぞれの専門の立場からBJを語り、後半ではBJの人生を紹介するセッションとなった。

下河辺先生はBJが残した3つのワードとして“difference”, “thing”, “voice”を挙げた。『批評的差異』でBJは「決定することの政治性」とは、「内的差異を外差に変換することだ」と洞察したが、下河辺先生はそこに書かれた“the entities”という概念が、晩年のBJ研究の中心となる「モノとヒトを分けるのは何か？」というテーマへと連続的に響いていたことを指摘した。また阿部先生は、ボードレーの詩を引き合いに出しBJ批評における「詩」の扱い方を論じた上で、言語哲学者のJ.L. オースティンとBJの詩に対するスタンスの相違を分析した。BJは「批評が詩と同じように言葉の聖域に足を踏み入れる」という「明るい態度」を取る一方で、阿部先生はオースティンのような冷やかで鬱的な「暗い態度」もまた、我われの詩に対するアプローチを規定してきたのだと述べた。

竹村先生はセクシュアリティ、フェミニズムの問題にも通ずる母娘関係の「母」の視点から、母が担わなければならないアンビバレンスのせめぎ合いをBJの著作から論じた。母とは出現（出産）と喪失（流産・中絶）という生命のあわいに位置しながらも、社会から期待される完璧性に対し、怪物的なもの（不気味なもの）を女性性の矛盾として抑圧しつつも引き受けざるを得ない立場を持っているというBJの洞察を確認した。最後の巽先生はベンジャミン・フランクリンの「墓碑銘」を引用し、かねてからBJが抱いていた「生命のないものに生命を付与



〔左から巽先生、竹村先生、下河辺先生、阿部先生〕

する」という「かたちへの偏愛」を、遺著『人間と物』（2008）で「読むという行為によって死せる作家の聲が甦り、文学が不滅の生命を帯びる」と再定義したことを指摘した。その上でBJの「生命のないものに生命を吹き込む」という手法が、日本のバービー人形やたまごっちへの興味へと発展していたことを指摘し、BJがジャパノロジー研究へと発展し得た可能性を語った。

後半の第二部では2010年3月にハーバード大学で行われたメモリアル（“Celebrating the Life of Barbara Johnson”）の様子が紹介された。このメモリアルは生前にBJ自身が立案し、3つの国（仏・英・米）と3つの文化（音楽・絵画・文学）を軸にプログラムされている。式典に参加された下河辺先生の解説によると、ヘンデルのメサイアで始まり、H.D. ソローの『ウォールデン』からの一節が朗読され、脱構築系批評家の甲辞に加え、イエール大学のロースクールでレクチャーをする在りし日のBJの映像が放映された。主催者ショシャナ・フェルマンのご厚意により、本ワークショップの終盤でもまさにそのBJの映像が放映され、会場のほぼ全員が初めて「動き・話す」BJを目にすることとなった。大きなスクリーンに映し出されたBJの姿に会場からは小さなどよめきが起こり、その後はフロア全体が真剣な眼差しでBJの姿を見つめ、声に耳を傾けていた。

また2011年1月にロサンゼルスで開催されたMLAの国際学会では、“Persons and Things: Barbara Johnson’s Legacy”のパネルが設けられ、親交の厚かったジョナサン・カラーやジュディス・バトラーらがスピーチを行った。その親しみに満ちた追悼のパネルは、BJの洞察でもある「不在への呼びかけ」であることを誰もが了承しつつも、その「差異」を会場全体が静かに共有した会だったように思う。

〔編集者註〕

本稿の筆者である小宮山真美子氏はこの3月まで特別ノ客員研究員として、長年に渡りセンターの研究活動に貢献されてきた。2010年4月に国立長野

高専の准教授に赴任されたが、昨年度は引き続き当センターの客員研究員を兼任されたため、この度の寄稿をお願いした。快く執筆を引き受けて下さった小宮山氏に、心から感謝を申し上げたい。

寄稿

中村春二先生と中村彝

CAPS 客員研究員 重野 純子

竹橋にある東京国立近代美術館には、貧困の中で創作活動を続け、若くして亡くなった明治大正時代の芸術家たちの作品も多く展示されている。筆者の研究対象である「中村屋サロン」に出入りした芸術家のなかでも荻原碌山(1879-1910)の「女」(CAPS Newsletter No. 100で紹介)と今回紹介する中村彝(1887-1924)の「エロシェンコ氏の肖像」も同館の常設展で頻りに展示される作品だ。いずれも国指定の重要文化財である。



〔《中村春二像》中村彝(つね)作、1924(大正13)年〕

中村彝は成蹊学園の創立者の中村春二の肖像画を描いており、成蹊学園史料館でこれを鑑賞することができる。中村春二は当時、彝のパトロンであった今村繁三の代理人として彝の面倒を見ていた。貧困と体調不良に悩まされ続けながらの創作活動を続けていた彝は、その窮状を

訴えつつ、画家としての活動についての報告を中村春二に送っている。中村春二の死後、彝は「唯一の兄を失ったようでした」と今村に書き送っていることから二人の間にあった深い交流をうかがうことができるだろう。成蹊学園史料館に展示されている肖像画は、彝が中村春二の亡くなった1924年に自らの持つ記憶と残された写真を参考にしながら遺族のために描いたものであるという。彝は同年のクリスマスイヴに死去している。中村春二の肖像画は、彝が最期の力を振り絞って描いた作品のひとつなのである。

中村彝という画家を研究していて興味深いのは、その画風が様々に変化しており、さらにそれらがレンブラント、セザンヌ、ルノワール、ゴッホといった様々な画家からの影響を色濃く見せていることにある。その死の直前の作品にはキュビズムの要素さえ認められる。つまり彼は17世紀から20世紀にい

たるまでの西洋の美術界におけるさまざまな潮流を20年ほどの画家としての活動期間中に消化し、その作品に反映させているのである。中村彝という画家の評価においてこの傾向をどう位置づけるかは筆者にとってひとつの課題である。

開国の前後から当時の日本には様々な時代や地域の芸術が一挙に紹介され、その受容をめぐる状況は非常にめまぐるしかった。日本におけるロマン主義は19世紀末からあらわれ始め、北村透谷などが理論的にこれをリードした。透谷の言論活動に刺激を受け、ロダンの創作スタイルに決定的な影響を受けた荻原碌山をはじめとする先人たちは創作の傍ら、芸術論もさかんに発表した。大まかに言えば、この時代、芸術家は「個性」に目覚めたのである。そして彼らから刺激を受けた若い芸術家たちはそれぞれの「個性」を表現する様々なスタイルを、西洋美術の偉大な遺産および最新の実験的な作品から取捨選択しながら追求していった。彝の一連の作品は、この模索の痕跡を非常に色濃く残しており、その画風の変遷こそが筆者には日本におけるロマン主義のおかれた当時の状況を体現しているように思えてならない。

2012年、成蹊学園は創立100周年を迎える。この機会に、中村彝による当学園の創設者・中村春二の肖像画を鑑賞しながら、あらためて成蹊学園が掲げる「個性を持った自立的な人間の創造」という教育目標について思いを巡らせてみてはいかがだろうか。



〔成蹊学園史料館・中村春二記念室(1階展示室)の様子〕

2010年度新規プロジェクトの紹介(第3回)

2010年度共同研究プロジェクト

「難民・強制移動民研究の新境地」研究概要

文学部 准教授 墓田 桂

2010年度に開始した共同研究「難民・強制移動民研究の新境地」の初年度は、2回の研究会を開き、1件の海外出張を支援するなど、好調に進んだ。第一回研究会は昨年10月30日(土)に10名の参加者を得て、また第二回研究会は2月27日(日)に5名の参加者を得て、いずれも成蹊大学にて開催された。どの報告も示唆に富むもので、参加者との意見交換は充実したものであった。毎回、5時間あまりにわたる長丁場の議論となったが、学際的な研究分野だけに、筆者にとっても有意義な学びの場となっている。

寄稿の機会が与えられたので、第二回研究会でも筆者が報告した保護をめぐるさまざまな考え方について、ここで少し紹介してみたいと思う。

通常、難民の保護は、本国による保護を望まない、あるいはそれが期待できない人々のために他国が代替的保護を与えるというものである。他方で、国内避難民の保護については、第一義的には当該国の政府が行うものであるが、それが十分ではない場合、国際社会が当該国に対して国内避難民を保護するよう促すことが求められる。その意味では当該国と国際社会との共同責任なのである。しかし、その国内避難民も、それぞれの国で置かれた状況は大きく異なる。自国民の保護を図ろうとしないばかりか、むしろ迫害や攻撃を加える政権も存在する。過去にはイラクのフセイン政権、現在ではリビアのカダフィ政権が思い起される。また、武力紛争下においては、政府側、反政府勢力側などが入り乱れて、その狭間で避難民や孤立した住民が危険にさらされる場合もある。

近年、人道的アクターの間や国連の安全保障理事会などの場で議論されるようになったのが、人々をいかに保護するかという課題である。武力紛争や極度の緊張状態においては、当該国に人権法や人道法の規範を遵守させることは容易なことではない。当局との粘り強い説得や交渉、住民の安全を高めるようなさまざまな配慮が必要となる。そこで、人道的アクター(人道援助に携わる国際機関やNGOなど)、政治的アクター(政治リーダー、外交官、安全保障理事会)、軍事的アクター(PKOや多国籍軍)など、多様なアクターが住民の保護においてどのような役割を果たすことができるという点が論じられ

るようになった。

他方で、「保護する責任」(Responsibility to Protect)という考え方が存在する。これはアナン国連事務総長(当時)の呼びかけに応じて設置された「介入と国家主権に関する国際委員会」が、2001年12月に国連事務総長に提出した報告書の中で示した理念である。簡潔に言うと、国家は自国民の保護について第一義的な責任を有するが、当該国が明らかに保護する責任を履行しようとしないうち、もしくはできない場合、または国家自体が加害者として国民に危害を加えている場合は、国際社会が代替責任を果たすべきという考え方である。そして、その手段として、条件付きで軍事行動を認めるのである。

第二回研究会が開かれた2月末、リビア情勢は緊迫化していた。筆者の報告を受けて研究会では、国際社会は「保護する責任」を果たすことになるのか、仮にそうだったとした場合、NATOが介入することが望ましいのか、あるいは反欧米の旗印に転化させないためにも、アラブ連盟やアフリカ連合が主導するのが適切かといった議論が繰り広げられた。果たして3月20日、安保理は決議1973を採択し、文民(civilians)と文民居住地区の保護のために、加盟国がすべての必要な手段を講じることを許可した。その後、多国籍軍による軍事介入が行われ、本稿執筆の時点では情勢の帰結は見えていない。しかし、確実に言えることは、上述の安保理決議は「保護する責任」の具現化において重要な分岐点となったということである。

研究対象がアクチュアルなものであるだけに、研究者は流動的な事象を追いかけることになる。研究成果が陳腐化するのも早い。しかし、難民・強制移動民研究という独自の立場で同時代の国際情勢と関わりが持てるのは研究者冥利に尽きる。この共同研究をサポートしてくださっているアジア太平洋研究センターには心から感謝したい。



「介入と国家主権に関する国際委員会」報告書の表紙

2010年度共同研究プロジェクト

「アイデンティティの創生と多元的世界の構築」研究概要

法学部 教授 湯山 トミ子

本プロジェクトは、グローバリゼーションの進行による世界の一元化とこれに拮抗する多元的世界構築の可能性と思想的契機を、中国を中心とするアジア世界のアイデンティティ創生から考察していくことを目的としています。初年度である2010年度は、研究協力者である田中克彦一橋大学名誉教授、宇野重昭成蹊大学名誉教授のご支援を得て、本年度活動の核となるシンポジウムを開催することができました。以下はこれを含む2010年度の活動概要です。

(1)7月31日(土): 第一回研究会(於成蹊大学)

北東アジア学の領域でアイデンティティ研究を開始している鳥根県立大学総合政策学部江口信吾准教授による「中国の北東アジア研究に見られる“北東アジア”北東アジアにおける複層的アイデンティティへの一視角」と、湯山による「帝国論とアイデンティティ研究」の報告が行われました。後者では、研究プロジェクトの基本視点として注目するアントニオ・ネグリ、マイケル・ハートによる“帝国とマルチチュード”論を取り上げ、これをめぐる討議の中から秋季シンポジウム開催の企画が生まれました。

(2)10月30日: 第二回研究会(於成蹊大学)

シンポジウム開催準備の他、浜田ゆみ氏、湯山によるプレ報告が行われました。

(3)11月13日: シンポジウム「多元的世界への問い 帝国の時代の言語とアイデンティティ」開催(於成蹊大学12時~18時、交流会於10号館ホール)

シンポジウムは、本プロジェクトの特徴である社会言語学的視点に基づき、言語とアイデンティティ形成について、「権力」をめぐる上と下からのベクトルという二つの枠組みで構成されました。基調講演(田中克彦一橋大学名誉教授「帝国言語の歴史とエトノス ロシアと中国」)で、オーストリア・ドイツ帝国以来の歴史的展開、ソ連型と中国型の比較により、言語、民族、国家の関係性、特質が析出され、続く第一部「帝国の言語政策」で、上海租界における帝国主義列強の言語政策(山本武利氏)、日本帝国主義の言語戦略(安田敏朗氏)、グローバル化を目指す現代中国のネットワーク型中国語世界戦略(浜田ゆみ氏)、第二部「アイデンティティと多元的世界」で、権力、国家レベルによる言語政策に対抗する“個”或いは権力を持たない集団から放たれるアイデンティティの形成を照射する、日本占領下台湾の自律的な言語形成(林正寛氏)、抵抗と屈折の内に育まれた朝鮮民族の思惟の継承(川瀬貴也氏)、中華帝国におけるムスリム形成の抵抗と自律性(安藤潤一朗氏)、権力の奪取なき“革命”を目指した魯迅の思

想形成(湯山)が報告されました。第三部質疑討論では、メディア論(土屋礼子氏)、朝鮮族(権香淑氏)、東洋思想(葛谷登氏)、政治学(光田剛氏)の各視点からの論議に、帝国民としての台湾生活体験による問題提起(園部逸夫氏)も加わり、盛況の内に論議と熱気が交流会に持ち込まれました。

(4)12月12日: 第三回拡大研究会

「ことば・文字・女の解放」

(ジェンダー史学会第七回大会自由論題、於お茶の水女子大学)

(3)のシンポジウムを補充するジェンダー視点による討議が行われました。課題の背景には、長い間、男性社会の象徴であり、公的社会形成の基盤として機能してきた漢字、及び漢字文化のもつ排他性と統一性、共有性に着目した「文字と女性」、「漢字と女性」の二部門、二報告が用意されました。遠藤織枝元文教女子大教授による「中国女文字の“すごさ”とそれを産んだ女性たちの“すごさ”」は、男性主体の漢字文化から排除されたがゆえに生み出された中国の女性専用文字「女書」により、男性社会から自らを隔離して女性が創り上げたコミュニケーション世界と文字文化創成の力、第二部門「漢字と女 組み込まれた女性表象」では、田中克彦一橋大学名誉教授「言語表現における女差別の伝統 ジェンダー論の入り口」により、欧米の言語との比較を基に、男性を担い手とする漢字に取込まれ、囲い込まれた女性存在 偏と傍の“女”、及び日本語固有の文字表現「オンナ・おんな・女・女性」のもつ意味が読み出されました。性差を乗り越えて切り拓かれるべき新たな文字文化、女の解放を見つめようとの熱気あふれる論議は、規定時間を越えて繰り広げられ、研究会終了後も長時間の交流会が実現しました。

(5)3月31日: 11月13日開催「帝国の時代の言語とアイデンティティ」シンポジウム報告書刊行基調講演をはじめ、新たに論文化された報告、宇野重昭教授による総括コメント、資料編には(4)の要旨、配布資料の一部も収録し公刊しました。

以上、2010年度の成果を基盤に、2011年度は国際シンポジウムを実現する予定です。



「帝国の時代の言語とアイデンティティ」シンポジウム報告書の表紙

2011年度 研究プロジェクト一覧

責任者名	研究題目と目的
金光旭 法学部 (継続)	日中経済刑法(期間:2009.4.1~2012.3.31) 題目:日中経済刑法の比較研究 目的:経済犯罪およびそれに対する刑事罰をめぐる日中両国の法制について比較研究を行う。
滝沢 誠 理工学部 (継続)	P2P オーバレイ・ネットワーク(期間:2009.4.1~2012.3.31) 題目:アジア太平洋地区のPeer-to-peer オーバレイ・ネットワークでのピア間の信用可能性の研究 目的:P2P オーバレイ・ネットワークにおけるピア間の信用可能性の形成過程を考察、定式化を行い、プロトコルを設計しプロトタイプを実装し評価する。
墓田 桂 文学部 (継続)	難民・強制移動民研究の新境地(期間:2010.4.1~2013.3.31) 題目:難民・強制移動民研究の新境地 目的:難民・強制移動民の現状および彼らをめぐる政策的・学術的動向を調査し、学問領域としての「難民・強制移動民研究」の定着を図りつつ、この問題に関する日本社会の認識を高めることを目的とする。
遠藤 不比人 文学部 (継続)	日本表象研究(期間:2010.4.1~2013.3.31) 題目:近代「日本」の表象形成と環太平洋の地政学 目的:近代における「日本」をめぐる特に美的表象を環太平洋という地政学的な磁場において歴史化すること。
大熊 昭信 文学部 (継続)	通文化主義の可能性研究(期間:2010.4.1~2013.3.31) 題目:環太平洋とポストコロニアリズム-通文化主義の可能性 目的:ポストコロニアリズムの観点から通文化主義を単一文化主義と多文化主義との関係で考察し、その新たな理論化を図る。
湯山 トミ子 法学部 (継続)	アイデンティティ研究(期間:2010.4.1~2013.3.31) 題目:アイデンティティの創生と多元的世界の構築-アジア・中国の磁場から 目的:グローバル化する世界において多元的世界を構築する為の思想的契機と可能性を検討する。特に中国を中心とするアジアにおけるアイデンティティの創生がもつ思想的意義と可能性、アジアと西欧世界の相互触発の可能性を探る。
上田 泰 経済学部 (新規)	自発的貢献行動研究(期間:2011.4.1~2014.3.31) 題目:組織に対する従業員と顧客の自発的貢献行動の統合的研究 目的:従業員と顧客が組織に対して行う自発的な貢献行動やその相互作用に注目し、その先行要因や影響を概念的ないし実証的に明らかにする。
山崎 章弘 理工学部 (新規)	中国の廃コンクリートリサイクル研究(期間:2011.4.1~2014.3.31) 題目:中国における廃コンクリートリサイクル利用技術の評価 目的:中国における環境改善技術への廃コンクリートの適用可能性について検討を行う。これまでの二酸化炭素固定、乾式排煙脱硫、リン回収を最適化するとともに、砂漠化土壌における土壌改良材や重金属汚染土壌における除去材としての性能を新たに評価する。さらに、各種技術を中国に適用した場合の効果、環境改善、エネルギー、コストの観点から総合的に評価する。
森住 史 文学部 (新規)	日本人英語学習者動機付け研究(期間:2011.4.1~2012.3.31) 題目:英語は脅威?憧れ?エンパワメントの道具?:日本人英語学習者の英語に対する態度 目的:黒船到来以来、大多数の日本人にとって、英語はアメリカの象徴であった。敵国語であった時代や、憧れの対象であった時代を経て、米国一国が覇権を誇った時代が終わりを告げたといわれる今、日本人の英語学習者は英語をどのような言語だと見なしているのか、また、その認識が個々人の英語学習への取り組みにどのような影響を与えているのかを探る。
今井 貴子 法学部 (新規)	野党改革の比較政治(期間:2011.4.1~2012.3.31) 題目:野党改革の比較政治 目的:野党第一党による組織改革、政策見直しなどの改革は、政権獲得後の政権運営にどのような影響をもたらすのかを明らかにする。

シリーズ 本を読む

吉見 俊哉、テッサ・モーリス・スズキ『天皇とアメリカ』(集英社 2010年2月22日発行)

CAPS 所員(文学部 准教授) 中野 由美子

アジア太平洋研究センターでは、2010年度後半から『人間の安全保障と北東アジア サステイナブルな地域社会をめざして』と題した連続講演会・シンポジウムを開催している。去る1月22日には、その第三回目として、オーストラリア国立大学のテッサ・モーリス・スズキ教授による講演会が開かれた。「再考・北東アジアの未来 移住、多様性、人間の安全保障」(原題 Rethinking Northeast Asia's Future from the Perspective of Human Security: Migration, Diversity and the Regional Public Sphere)と題された講演会は、本学の学生・教職員のみならず一般市民の参加も多く、盛況を博した。

本書は、先日のシンポジウムの講師・モーリス・スズキ氏と吉見俊哉氏(東京大学大学院教授)による対談集である。本書『天皇とアメリカ』には、副題はない。しかも、天皇とアメリカというスケールの大きな組み合わせである。この潔い表題の奥に、どのような洞察と議論が展開されているのか、思わず急いで表紙をめくりたくなる読者もいるにちがいない。本書によれば、「伝統、宗教、土着文化、愛国心」などを表象する天皇と「近代、合理主義、外来文化」を表象するアメリカとは、一見すれば両極に位置しているはずであるが、少なくとも20世紀以降、「帝国としてのアメリカと日本的なものの象徴としての天皇が、複合的に絡み合いながら相互作用として機能してきた」という(31頁)。この「天皇とアメリカ」という構造を再検証し、この構図を越えた未来への想像力を獲得すること 著者のこうした問題関心は、そのままストレートに本書のタイトルになっている。

第一章「近代」、第二章「現代」に続く「現在」と題された第三章では、リーマン・ショックやオバマ政権の誕生といった、ここ数年の大きな変化を踏まえた議論が展開されている。かつてモーリス・スズキ氏は、『朝日新聞』への寄稿において、「公共領域にあるはずの政治が『権力者たちにより私益化』される現象」があるが、とくにロナルド・レーガン、

ジョージ・ブッシュ(シニア)大統領政権期にそれが急速に加速されたと指摘した(テッサ・モーリス・スズキ「アメリカを問い直す 自らの民主化こそ必要」『朝日新聞』2003年12月25日)では、オバマ政権の誕生によって、こうした現象はどのように変化したのか、あるいは変化していないのか。昨今の世界情勢の激変によって、分離不能な「セット」としての「天皇とアメリカ」というかつての構図を越えた、別の枠組みが必要とされている。こうした状況のなかで、「天皇とアメリカ」の相互関連性を再検討する本書の試みは、多くの読者の関心を惹きつけることだろう。

本書のなかで、モーリス・スズキ氏は、「何も変わらないと思ひ込みニヒリズムに陥るよりも、間違ってもいいので自分で考えることで想像力は開かれていく」(221頁)と主張している。事実、冒頭で言及したシンポジウムにおいても、フロアから、東アジアにおける国家間関係や人の移動と交流、視覚メディアの効果と課題、国民国家概念の再考といった自由で多岐にわたる質問があった。このことは、年齢・性別・職業などの点でも多様性に富んだ聴衆が、モーリス・スズキ氏の講演に刺激を受け、一人ひとりの想像力を解放しようとしたことの現れであるように思われた。このシンポジウムの場では、聴衆のあいだで、未来への想像力を取り戻そうとする意欲とともに、自由な発想と議論の大切さを共有しようとする雰囲気があった。本書を手にした読者のあいだでも、一人ひとりが日々の生活のなかで想像力を解放し、著者のいう「天皇とアメリカ」という構図を越えた洞察力を涵養し議論を重ねることが可能となるのではないだろうか。本書は、個人の、そして未来への想像力がもたらす可能性に勇気づけられる、読み応えのある一冊である。



アジア太平洋研究センター(CAPS)研究プロジェクト募集!

CAPSでは、来年度のプロジェクトを募集いたします。応募書類受付:6月21日(火)~7月7日(木)

共同研究プロジェクト(3年間・研究費は上限600万円)

メンバー: 本学専任教員を少なくとも2名含むこと

責務: 終了後1年以内に叢書を出版、など

パイロット・プロジェクト(1年間・研究費は50万円)

メンバー: 本学の専任教員による個人研究(1名)

責務: 本センター紀要に論文提出、など

プロジェクト説明会

プロジェクト説明会を下記の日程で行います。是非ご参加ください。

5月17日(火) 12:15~13:00

5月19日(木) 12:15~13:00

場所: 10号館2階第2中会議室

リービ英雄『我的日本語The World in Japanese』(筑摩書房 2010年10月15日発行)
法学部 客員研究員 今井 隆太

「我的日本語」とは、わが日本語。日本語に堪能な著者が、あえて「我的」という表現を使う。リービ英雄という、日本語で書く作家の、その日本語を見てみよう。「英語を母国語として生まれたばかりが、若き人生の途中で、日本語に目がさめた」(219)というとき、「日本語に目覚めた」と書かない理由はなんだろう。「若き人生」と書くひとがである。「我的」にはおそらく、中国が意識されている。「目が覚めた」には、おそらく、かれ自身が書くことによって生み出される新しい日本語が意識されている。

リービ英雄は、日本文学の作家として、1987年に日本語で書いた小説「星条旗の聞こえない部屋」を発表して初めて存在するようになった。「日本語を母語としない西洋出身者による初めての日本文学として話題を呼ぶ」(「年譜」『星条旗の聞こえない部屋』講談社文芸文庫版所収)んだとある。その作家の、「日本語の世界、というよりも、日本語による世界、日本語を通してはじめて見える世界」、または「日本語の人生」(ともに220)である。

1950年にアメリカ合衆国で生まれ、台湾とアメリカとに住んだ著者にとって、日本語は習得すべき言語であったはずだ。横浜のアメリカ領事館内の日本語研修所長をしていた父の住居を出て、早稲田大学で講習を受けたが飽きたらず、「しんじゅく」に通うようになる。「教科書的な日本語に嫌気がさして、生の話し言葉の領域として、日本語に入ったのだ」(12)とか、「言葉を潜り戸にして、町の中へ入り込んでいった」(27)と表現されたそれは、「新宿がなければリービ英雄の日本はなかった。あるいはリービ英雄の日本語はなかった」(23)というほどに強烈な体験であった。

60年代終わり頃の新宿、その「生の話し言葉の領域」でかれは、「東アジア的文化生命の最後を体験」したのだという。「戦後日本」とも「近代の終わり」とも表現されている時代とその内実。同様に80年代、「最後の軍事政権、全斗煥のソウル」でも、88年のオリンピックを境に消えてしまった「新宿であるのころに見たものと似た、東アジア的文化生命の最後」(26)を、「垣間見」ることになる。そして中国でも、「最初に中国に行った九三年は、いわゆる毛沢東の中国の、路地の面影を残す、ほんとうに最後

の時代だった」(143)それが「九〇年代の半ばごろから通い始め、いま中国大陆の一九四九年、あるいはその前からあった古典的近代文明の最後を見届けようとしている」(26)。ついには、「アメリカ型」文化一色になりつつある世界の中で、東アジアの古典的近代文明の終焉を垣間見ることが人生であるという境地に到達する、その最初の体験が新宿だったということだ。

「日本語によって、日本語を通して、ぼくも変わり、世界も変わった」(あとがき)というかれの日本語の本質とはなにか。それを窺い知る手がかりが人麿論だろう。万葉集の翻訳者でもある著者は、人麿の次の歌に言及する。「東(ひむがし)の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」。東の野に立ち上がる朝の炎と、西に沈もうとしている月とはそれぞれ、天皇になろうとしている軽皇子と、その父で天皇になることなく亡くなった皇太子草壁皇子を表し、歌はそれぞれの生と死を同時に把握している。しかも映像的に。「軽皇子は自分の父の死を想う。とてもプライベートな瞬間だろう。天皇という、もっともパブリックな存在の、きわめてプライベートな感情を、人麿がここで詠んでいる」(70)。こうした公と私的な感情との同時性に、リービ英雄は日本語の可能性を見ている。こうした視点が、かれを小説家にした。と同時に、「言葉の歴史を意識」しながら、「言葉が別の命を吹き込まれる」新しさに目を向けさせた。

「言葉が別の命を吹き込まれる」(173)とは、天安門を訪れた際に連想された人麿の「かぎろひ」9・11の映像を見て浮かんできた「千々にくだけで」(芭蕉の句「島々や千々にくだけで夏の海」)などの、古典的表現を、現代の大事件に用いること、それによって衝撃性や象徴性や現代性をこころに納めていくことである。と、まずはそう言い納めてしまおうけれど、本文中ではもっと豊かな展開がなされている。



アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2010.12.14 ~ 2011.3.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

12月14日(火)粘土を利用した高効率な水質浄化材料研究パイロットプロジェクト海外出張(12月22日まで)

出張者:理工学部助教・本郷 照久
調査地:アメリカ合衆国・ハワイ州ホノルル
目的:国際会議への参加、及び講演のため

12月17日(金)センター主催(国際教育センター協力)連続映画鑑賞会開催、10:40-13:00

テーマ:『初恋のきた道』(1999年、中国)

講演者:法学部教授・光田 剛

場所:4号館ホール

出席者:70名

12月18日(土)センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と北東アジア」第2回開催、15:00-16:50

テーマ:地球環境保全とアジア環境協力の課題

講演者:一橋大学大学院経済学研究科教授・寺西 俊一

場所:3号館102教室

出席者:40名

1月3日(月)日本表象研究プロジェクト海外出張(1月9日まで)

出張者:文学部教授・遠藤 不比人

調査地:英国・ロンドン

目的:資料収集のため

1月22日(土)センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と北東アジア」第3回開催、15:00-17:00

テーマ:再考・北東アジアの未来 移住・多様性・人間の安全保障

講演者:オーストラリア国立大学教授・テッサ・モーリス = スズキ

場所:4号館ホール

出席者:185名

2月20日(日)日本表象研究プロジェクト研究会開催、10:00-17:00

テーマ1:「ロビンソン・クルーソー」と呼ばれた日本人たちに関する「環太平洋」という地政学的考察

報告者1:筑波大学准教授・吉原 ゆかり

テーマ2:冷戦期の北米における川端康成の美学化=脱政治化の歴史的意義

報告者2:一橋大学教授・越智 博美

場所:アジア太平洋研究センター会議室

出席者:9名

2月27日(日)難民・強制移動民研究プロジェクト研究会開催、12:00-17:00

テーマ:国内避難民問題、第三国定住等について

報告者:文学部准教授・墓田 桂

難民事業本部・中尾 秀一

東京英和女子学院大学教授・滝澤 三郎

場所:10号館

出席者:5名

3月5日(土)日本表象研究プロジェクト研究会開催、14:00-16:00

テーマ:「昭和の喜劇王」古川ロッパとアメリカ中産階級のイデオロギーとの関連

報告者:明治大学非常勤講師・中野 正昭

場所:3号館101教室

出席者:3名

3月6日(日)通文化主義の可能性プロジェクト研究会開催、14:30-17:00

テーマ:ポストコロニアリズムと離散 - ニコラス・ギジェンの場合

報告者:明治大学文学部教授・越川 芳明

場所:3号館101教室

出席者:7名

センター招聘外国人研究員

1月17日(月)HSU Hui-Huang氏(淡江大学 Computer Science 学科准教授)が「Fuzzy RFID Information Processing for Home Safety」に関する研究のため来日(1月31日まで滞在)

2010年度運営委員会・所員会議開催の記録

4月8日(木) 第1回所員会議
4月22日(木) 第1回運営委員会
5月11日(火) 第2回所員会議
5月14日(金) 第3回所員会議(メール会議)
5月25日(火) 第2回運営委員会
7月13日(火) 第4回所員会議
7月23日(金) 第3回運営委員会
9月29日(水) 第5回所員会議
10月13日(水) 第6回所員会議
10月19日(火) 第4回運営委員会
1月12日(水) 第7回所員会議
1月25日(火) 第5回運営委員会
2月2日(水) 第8回所員会議(メール会議)
2月8日(火) 第6回運営委員会(メール会議)
2月10日(木) 第9回所員会議(メール会議)
2月16日(水) 第7回運営委員会(メール会議)

2011年度研究センター構成メンバー

所長・運営委員長	中神 康博	経済学部教授
運営委員	高橋 史郎	経済学部教授
	小島 紀徳	理工学部教授
	高田 昭彦	文学部教授
	李 静和	法学部教授
所員	山本 晶	経済学部准教授
	滝沢 誠	理工学部教授
	中野 由美子	文学部准教授
	北島 周作	法学部准教授
主任研究員	愛甲 雄一	
特任研究員	高一	
特別研究員	趙 貴花	
客員研究員	菅原 大一太、重野 純子、 山上 亜妃、渡邊 大輔、 トク タホ、Dida Reco、 Ailixier Aikebaier、陶 冶	
課長	神田 昭子	
主査	佐々木 大介	
事務補佐	秋吉 加名子	

CAPS Newsletter No.110

2011年4月15日発行

編集発行:成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/